

「エン・クリスト」45 号 一粒の麦

1991 年 1 月発行

私が小池先生にはじめてお会いしたのは、今から31年前、1959年の11月8日（日）の京大楽友会館での小さな集会においてであった。次いで翌11月9日（月）夜、同じ楽友会館の二階講演室での公開講演「無的実存」は、私にとって先生との決定的な出会いとなった。こんなに自由で生き生きとした、そして心の最も奥深い求めにこたえて満たしてくれる講演に接したのははじめてだった。キリスト教といえば、とかく堅苦しく窮屈で、戒律と信仰箇条（教義）の墨守ゆえに思考も視野も狭くなり勝ち、という先入観を完全に打破して、広大無辺な真理の天空へと羽ばたかせていただいた、あるいは、そこへの道を示していただいた、そんな思いで一杯であった。先生は、

「東洋の梵鐘^{ぼんしやう}は上から吊り下され、天空に抱かれ、天空を宿す。鐘の中は空っぽだ。鐘を支える台も支え柱もない。だからこそ、あの妙^{たえ}なる音色、妙なる響きを発する。私はその鐘のように、キリストに首根つ子をつかまえられ、足場、立場をもたない。キリストの十字架が小つぽけな私（小池）をぶっ飛ばして下さったから、キリストという無限無量が入って来て下さったから、キリストの大生命の妙なる音を、響きを発するものとされたのだ」

「だから私は自分のことを天鐘と呼ぶ」

と語られた。これは講演の中のほんの一コマを紹介したにすぎない。それ以来私は、先生の著作や講筵の録音テープによつて、また、春、夏、秋の特別集会に連なることを通して、先生の中に開示され、かつ先生がその中へと限りなく深められ導かれてある、キリストの福音の真理の世界へと導かれて来た。その意味において先生は、私にとってのかけがえない恩師である。

さて、本日の演題は「一粒の麦」ということで、これはヨハネ伝12章24節に由来する。

「イエス答えて言い給う。『人の子の栄光を受くべき時きたれり。誠にまことに汝らに告ぐ、一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの果を結ぶべし。己が生命^{いのち}を愛する者は、これを失い、この世にてその生命を憎む者は、これを保ちて永遠^{とこしえ}の生命に至るべし。人もし我に事^{つか}えんとせば、我に従え、わが居る処に我に事うる者もまた居るべし。人もし我に事^{つか}うることをせば、我が父^{とうと}これを貴^{とうと}び給わん。』（ヨハネ12・23～27）

キリストが十字架にかかられる前に弟子にこのように語られたのである。



「一粒の麦、地に落ちて死なずば……」

自然界における麦の成育をみるならば、刈り入れどきに豊に実が実ったとき、先に播かれた種（麦粒）は既に朽ち果てたすがたである。地中に播かれた麦粒は、その殻が破れて根が生じ、芽を出して成育していく。元の固い麦粒のままのすがたとどまつている限りは、つまり、自己の保身につとめている限りは、決して実を結ぶことができない。この自然界の摂理（せいり）を引いてキリストは、人間は自己愛という殻に閉じこもっていたのでは、ほんとうの生命、永遠の質をもった生命（永遠の生命）に到ることはできないこと、かえって

「この世において己が生命を憎む者こそが、これを保ちて永遠の生命に至るのだ」

と語っておられる。マタイ、マルコ、ルカの各福音書では、

「己が生命を救わんとする者はこれを失い、わがため（『キリストのため』、福音のため、己が生命を失う者は、これを得べし）」

と語られている（マタイ16・25、マルコ8・35、ルカ9・24）。

「己が生命を愛すること、自己愛は、人間の自然の欲求であり自然のすがた（性向）である。それがいけないとは、そして、その果て（結ぶ実）は「死」であり「滅び」であるとは、どういうことか。しかし、イザヤ書にあるように、

「わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、わが道は、あなたがたの道とは異なっていると主は言われる。天が地よりも高いように、わが道は、あなたがたの道よりも高く、わが思いは、あなたがたの思いよりも高い。」（イザヤ書

55・8～9）

と主は言われるのである。

私は、戦後のわが国の教育の最大の欠陥は、右のようなキリストの言の真理性に目を向けようとしなかったこと、そしてキリストの言と正反対のことを教えてきたことにあるとみている。日本の社会は、学校においても家庭においても、「己が生命を愛すること」を至上のものとして、自己愛を育（はぐ）んでいる。世の中の風潮また然り。「この世」「現世」での「幸福」がすべてであり、それを約束し、保証してくれるもの——宗教、お金（財力）、地位、権勢等々——のためには労を惜しまない。しかし、キリストが求め、その中に生き抜かれた「神の国と神の義」をまず第一に求めるような生き方、「神の国と神の義」に己れを献げていくような生き方は、愚かとして顧みられない。

神の僕（しもべ）としての自覚に徹して生きられたイエス・キリストは、「苦難の僕」（イザヤ書53章）の道を歩まれた。その極まるところは、父神の聖意ゆえの十字架上の死であった。正しく「一粒の麦」となって、その生命を我ら罪びとのあがない（贖罪）のために献げて下さった。それによって我らは、永遠の生命にあずかる者とされた。「一粒の麦」に関して小池先生は次のように書いておられる。



「舎兄〔小池政美〕が私の信仰の第一の恩人である。私にとってこの兄は地に落ちて死んだ一粒の麦となった。」

「イエスは『一粒の麦の死』において、御自身を語っておられる。この麦一粒は正に原始力をもった一粒である。この十字架の死、贖罪死は、無数の人々のための死である。『多くの果』どころではない、『無量無数の果』を結びつつ、歴史の終末にまで及ぶのである。」（著作集第一巻『無者キリスト』264頁）

「二粒の麦の実存的な事態、棄石の終末的な事態、そこに福音に生きる者のどん底のすがたがある。担いと抱きの愛すらも裏きられ、棄てられた人々こそは、歴史の終末にあたり、新天新地の神の国においてキリストと共に最も貴き存在とされるであろう。東西のキリスト教史上の多くの殉教者たちは、正に福音のための棄石で、聖国では宝玉の如く輝く存在である。」（同265頁）

まことに然り、アーメンである。このような生き方こそが、まことのキリスト者の生き方ではないか。小池政美という尊い一粒の麦から小池辰雄先生が生み出され、次いで先生が一粒の麦となって私たちキリストの生命に生きる多くの魂を生み出して下さった。そうであるならば、今度は私たち一人一人が、それぞれらしく「一粒の麦」のすがたにおいて、キリストなる無限無量の生命、愛のいのちをわかち与えてゆかないではいられないではないか。根源なる「一粒の麦」主キリストの忠実なる弟子たるの自覚をもって。アーメン。



「エン・クリスト」46号

1990年京都秋期福音特別集会報告

1991年4月発行

既に前号で報じられた如く(第45号18頁)小池辰雄先生の聖書伝道五十年を記念する京都講演会は京都キリスト召団と京大エマオ会との共催により1990年11月17日(土)午後2時より京大会館で開催された。来会者は約160名。司会者錦織成史兄(京大教授)の懇切な開会の辞(本号掲載)と熱き祈りに導かれ一階講演室は真摯な張りつめた空気に包まれた。讃美歌228「ガリラヤの風」、聖書朗読・ヨハネ伝12章20～36節の後、前座をつとめた奥田の講演は「一粒の麦」(第45号掲載)。小憩後、讃美歌286「神はわが力」、続いて小池先生の講演「日本に今何が欠けているか」(第45号掲載)。この講演は先生の京都での最後の講演とのこと。万感胸に迫る思いでこれを拝聴した。白熱の力溢れる講演であった。引用されたチャップリンの言葉等とても印象深かった。時間の関係で講演の終りの方を端折って戴かなければならなかった事は申し訳ない事だったが、立ち去り難い思いで会場を後にされた方々も少なくなかったであろう(5時10分閉会)。

講演会の後、会場を御車会館に移して京都秋期福音特別集会(京都キリスト召団主催)。東京・裾野・岡山・四国、それに近隣の大阪・奈良、地元の京都、の各召団から計50数名、召団外からは和歌山祈りの家の田辺恵雄牧師が二、三の教友の方々を伴って参加された。小池先生による講筵主題は「イザヤ書」。第1回集会(17日夜、19時～21時)のための聖句は、

「万軍の実存主、我が国に遺れる者を留め給う」(イザヤ書第1章9節による)

であった。司会は大阪キリスト召団梅村康太郎兄、讃美歌は召団讃歌A18「聖書の扉に」、聖書朗読はイザヤ書1・1～9、司会者としての祈祷の後、梅村兄は最近改めて

「まず神の国と神の義とを求めよ」

とのキリストの言に迫られ、繁忙な職業生活の中でもとすれば神様のことが後回しになりがちとなる自己の在り方に対して真剣に無条件に、神の国を第一に、神を第一に(God first)の生活に徹すべき決意を表明した(本号掲載)。召団讃歌A32「イスラエル・ユダの」1、5、7～10節のあと、聖書講筵は「遺れる者」。講筵の冒頭に小池先生は梅村兄の証言にふれ、

「God firstは現実はどうしたら可能か。我々の側から何を意気込んでダメだ。窓を開き、心を開き、自分を開け放つ。すると光が入ってくる。キリストという光が。

キリストに圧倒される。God firstになる。そこからキリストの業が展開する。我々は空気に包まれているから空気を吸わざるをえない。そのようにキリストの霊気が我らを包み、我らを活かす。キリスト一切だ。初めも、中も、終りも。キリス



トに按手^{あんしゅ}していただいていると自覚することだ
と論^{ろん}すがごとくに語られた。

「キリストに圧倒されている」

と語られるや烈しく異言（靈言）が先生の口から波状的に流れ出た。高次の祈りの如く、天界にこだましている様な心地よい、厳肅な響きであった。信とは現^{うつ}なりとは、正に先生の現実がそれである。「遺れる者」の講筵要旨は本号のそれに譲る。強く印象に残ったのは、「遺れる者」という言葉は全イザヤ書を貫いていること、新天新地の到来するまで神の歴史は遺れる者の歴史であること、そしてキリストの絶対恩寵に圧倒されて生きる者こそが「遺れる者」であり、実は、神によって「遺されたる者」であるとの自覚に生きよとの迫りである。召団讃歌A33「主なるキリストは」1、5、8、12節をもって閉会。

第2日（18日（日））は早朝の御所での早天祈祷会（有志）のあと、第2回集会（9時半～12時）は四国キリスト召団の森下一男兄の司会により、京都召団讃歌「聖名に在りて」、聖書朗読はイザヤ書2・1～5。森下兄は、四国での聖日集会は目下、奥様（智恵子姉）との二人だけの集会であること。常時、祈りを共にする兄姉の与えられんことを祈っている旨話された（森下兄の証言要旨は本号に掲載）。召団讃歌A14「戦尽きせぬ人の世や」のあと、聖書講筵は「終末的平和」、これに因む聖句（垂紙）は、

「汝らは剣を鋤と成し鎗を鎌と成し戦争無からしめん」（イザヤ2・4に由る）

であった。本講筵の印象の一端を記^{しる}すならば、イザヤによって語り出された預言の事態がまさしく主イエス・キリストにおいて成就しているということ、我らはこの神の歴史の中に抱き取られ、その中を歩まされていること、キリストにつかまれてキリストの中に生きるとき、天国的現実が既にわがうちに成っているという、想いを絶する歓喜と希望を賜っていることを体感させられた。召団讃歌B1「君は葡萄樹」をもって第2回集会は終り。

午後は1時半～4時半、感話会と祈祷会。お一人お一人の証言内容はそれぞれに感銘深いものであった。とりわけ、甲府から全盲の身で単身参加された天野暁子さん（盲学校の先生）の御証言と輝く姿は我々に大きな感動を与えた。また、長年にわたる教会での牧会・伝道活動から離れ、今は和歌山祈りの家を拠点として独立伝道の道を歩まれている田辺恵雄牧師の御証言は、我々にとっての大いなる励ましであった。小池先生が会の終りに当たって、

「皆キリストの霊に触れて語ってくれた。感謝です。」

とおっしゃった通り、兄姉達の証言は主キリストへの讃美に溢れたものであった。今回の特別集会は温暖好天という自然の恵みの中、一つ御霊に包まれ貫かれた心満ち足れる集会となったことを、来会者一同とともに心から感謝するものである。なお今年（1991年）の京都特別集会はペンテコステ（聖霊降臨記念祭）の集会をかね、5月18日（土）夕方から19日（日）の両日開催される。再会を楽しみにしつつ筆をおきます。心からの感謝をもって。



「エン・クリスト」47 号 特別号

聖書伝道五十年記念文集「まえがき」

1991 年 5 月発行

昨年（1990 年）9 月 22 日をもって小池辰雄先生は、聖書伝道五十周年を迎えられました。先生ご自身の自覚としては、ひたすら聖霊の証し人として、聖霊の愛と力に支えられ導かれて、孤軍万軍の歩みを続けてこられるうちに、50 年という一つの峠——大変に意義深い峠——を越えられた、というのがいつわらざる御感懐かと存じます。先生は、常に前進してやまずと、いつも初心に立ち帰りつつ前に向かってひたむきに進み往く「炎の霊止」であられます。精神のみずみずしさ、童心、宇宙を友とする心、そういった表現がびつたりする先生であります。

このような先生から親しく教えを受けた者、お導きをいただいた者たちが、伝道 50 周年という意義ある年にあたって、ささやかながら、先生と主様への心からの感謝を表わしたいとのやみがたい思いに動かされて、このたびこのような記念文集を編むこととなりました。

かつて小池先生は、伝道 45 周年にあたり、「日本キリスト召団の歴史的使命」と題する講筵（「エン・クリスト」24 号掲載）において、私達に向かって次のような呼びかけをなさっています。

「各召団の兄弟姉妹よ、各召団はそれぞれの特質特色を以て主の栄光を現わす身証体であっていただきたい。決して全体主義ではない。各召団の各員が誰でも天下一品です。神の作品にできそこないはない。キリスト者（クリスティアノス）は「聖霊の属」（もの「プネウマトス」）聖霊者でなければならない。それはパウロがその手紙で宣言している通りです。かくて十一召団はキリストというコンダクター（指揮者）によつて天的な交響曲を奏かなでます。皆使命をもった実存です。信即行の使徒的実存！多言は要らない。この福音を身証することあるのみ。」

と。先生は、各召団と召団の各個人を大切にされ、一人ひとりがキリスト直結の信を土台とし、聖霊という共通の生命をいただいた兄弟姉妹として、百花繚乱と花咲くことを願ってられました。先生は更に次のように述べておられます。

「要するに各人の生活の原動力が贖罪の十字架を土台とし、聖霊の御はたらきによるものであることに於て一つである。この十字架・聖霊の一から主の栄光体現の多が生ずる。そしてこれらすべてが即ち神・キリストへの感謝であり讃美である。そういう個体の在り方の焦点が十字架・聖霊である。それゆえ個体は無者であり



無限無量の質を賜った者である。まきれもない天下一品の個でありながら、キリストの光の中の無的実存である。この個の集団が霊妙な交響曲であるという念願に生きている。」

本「記念文集」は、先生のこのような呼びかけに応えて、私たち一人ひとりが「福音をどのように受け取ってきたか、これを日々の現実の生活の中でどのように活かしてきたか（福音によってどのように活かされてきたか）」を共通の主題とすることといたしました。

また、小池先生には自由な内容での御寄稿をお願いいたしましたところ、

「聖書伝道五十年の峠にて——その1990年9月22日を記念して——」

と題する長篇の詩をいただくことができました。心から感謝いたします。

なお、昨年9月29日の東京での「小池天海聖書伝道五十年記念講演会」に関するものとして、「小池先生との出会い」と題する奥田の証言および、西千恵男兄の司会の辞、それに松岡淑子姉の文章を掲載することとしました。

召団外からは、小池先生並びに各召団と信仰的交りの深い小諸・キリストの石垣会を代表して、川口真理子姉より御寄稿いただくことができました。

小池先生におかれましては益々ご壮健にて、主の尊い器として、主の賜りし御使命を果たして下さいますよう、召団員一同、心から祈りつつ、この記念文集を主キリストの聖前に捧げるものであります。

1991年5月1日 記



「エン・クリスト」47 号 特別号

小池先生との出会い

1991 年 5 月発行

「私が今日ここにこうして立っていることができますのも、主イエス・キリストの恵み、——主イエス・キリストが私の中に息づいて下さったという事実、これをおいて他にありません。そして、そのように主イエス・キリストを私の中に根づかせ、息づかせて下さったかけがえのない恩師が小池辰雄先生であります。」

これは、1990 年 9 月 29 日、東京での「小池天海聖書伝道五十年記念講演会」において、先生の御講演の前座をつとめる私の証言「小池先生との出会い」の冒頭の言葉である。以下にはこの「証言」において語った内容を要約してしるすこととしたい。

小池先生との出会いは 1959 年 11 月 8 日（日）、京都大学楽友会館における夜の小集会での聖書講筵「向処如何」（ヨハネ伝 14 章）にはじまる。翌 11 月 9 日（月）の夜は、同じ楽友会館の二階大講演室における京都大学エマオ聖書研究会（後に京都大学エマオ会と改称）主催の公開講演「無的実存」。私はその司会をさせていただいた。たまたま日本独文学会が京都大学で開かれ、先生が京都へお出でになるというので先生を私たち若き信仰の群れに紹介して下さった方があった。それが今述べた小集会と公開講演会となつて結実したのである。それまで私は小池先生を全く知らなかった。お顔はもちろん、お名前も知らなかった。しかし、この講演会は、小池先生との出会いをもたらし、その後の固い絆（きずな）の第一歩となった。

私は大学卒業後の 2 年目、まもなく 24 歳になろうとする夏のある夜、大学の友人市川喜一君の導きでキリストを救主として信ずる者とされた。同君の所属する教会は北欧のペンテコステ派の教団に属する熱心で純粋な信仰をもち、聖書に極めて忠実な教会であった。しかし、それ故にこそといおうか、他面、もう一つ溶け込みがたいものを私は感じていた。それは、この世の現実生活、職業生活、そして日本の文化（宗教的伝統も含めて）に対する態度、関わり方においてであった。私のように法律学の研究に携わる者にとって「福音」あるいは「信仰」とは何か、ということが私にとつてのつぴきな問題となりつつあった。宣教師は言う。

「聖書一冊さえあれば、ほかに殊更に勉強することはいらない。聖書にすべてが含まれている」

あるいは、

「聖書に照らして、法律や法律学の正しさ（ないし誤り）を検証すればよい」

また、聖書の中における神話の要素を全く認めない。すべてを字義通りに受け取らねばな



らない、という。信仰とは「信じ込む」ことなのである。そうでなければ立派な信仰者とはいえない、と。また、キリスト教以外の宗教の正当性——共存可能性——を認めない。

自由 こんな状況下で小池先生の講演に接したのである。「何と自由な！」というのが第一印象であり驚きであった。生命が自由の空間にはずんでいる。真理は自由であり、自由の中に生命が躍動する。目を見張る思いであった。先生は語られた。

「凡そ真理であるならば、それがフイフイ教であろうが仏教であろうが、その他どのような宗教であろうが、また哲学であろうと思想であろうと、全部キリストの光でもって、聖霊の光でもってつかまえ、吸収することが出来る。決して混淆して変なことになるような心配はいらない。むしろ、それぞれを正しく位置づけ、方向づける（オリエンテーレンする）ことができるようになる。キリストの霊、聖霊は素晴らしいんだよ。一切を包摂する豊かさをもっているのだ。よく、キリスト教を信ずると人間が狭くなる、視野が狭くなる、といわれる。決してそうではない。キリストの光でものを見ると、ほんとうの相が見えてくるのだ」

と。私の心は躍った。これこそ私が求めていた世界であった。自由と真理、真理と自由、これは相即しているのだ。キリストの十字架で「我執」という罪の根源から解放され、自由の御霊を賜わるとき、人は真に創造的な営みへと導かれると。なぜなら、神は創造主であり、人に生命を与え、人をして創造の働きへと限りなく導き給うからである。宗教の次元は樹木における根の相であり働きである。人の目には見えない。これは祈りの世界である。祈りによって御言、み霊に直結する。これが生き生きと活動しているときにのみ、見ゆる空間における樹木の幹、枝、葉、花、果が豊かに展開する。即ち、幹は道徳、枝、葉は学問、政治、経済等の人の営み、花は芸術といったところ。地下に伸びゆく根と天に向かつて伸びゆく幹、そして枝々とは、方向は正反対だが、両者が一つにつながっていないと樹は枯れてしまう。文化・文明という見ゆる世界は、見えざる根（宗教＝福音）によって担われていなければならない、と。

その頃、先生は『聖意体現——主の祈り——』と題する小冊子を出された。その年（1959 年）のクリスマスに先生はそれを私に贈って下さった。幾度び私はこれを愛読したことであろうか。名著である。読む者をしておのずから祈りへと導き入れる。キリストの語られた福音——神の国のおとづれ——の終末論的性格が鮮やかに示されている。

その後の先生のお導きを通して、先生の福音把握、聖書に対する態度において、私が深く感銘を受けたのは次のような点である。私自身の観るところ、一般に聖書に対する態度としては、何が何でも、無理にでも「信じ込む」信仰か、さもなくば、聖書を学問的な研究対象として距離を置き、冷静に研究し分析し理解しようとする態度、このいずれかに偏りがちである。前者は危なっかしく不安定である。後者には生命がない。そうした中であって、小池先生は、学問的に、理性的に、深く「理」（ことわり）を追求されながら、同時に、深



くキリストの、みたまの次元にわけ入れられ、正しい意味での霊の次元を体験、体得されている。それでいて、先生の「霊的」は決して、いわゆる「霊力的」ではない。キリストの十字架の前に全存在を投げ出し、明け渡し、ひたすら主の「みたま」が聖意にしたがって自在に働き給うところに委ねきつておられる。「十字架における砕け」、キリスト御自身が十字架で砕かれ給うたその「砕け」を絶対恩寵として無条件に賜わる「砕け」「無」が先生の祈りの実存における根源の「場」なのである。

身読 先生は、祈りとは、自己の全存在をキリストの中に投げ入れることだ、と言われる。頭で祈るのではない、からだで祈るのだ、と。からだでは、全存在でということ。聖書を読むのもそうだ。頭で読むのではない、からだで読む、身読だと。1961 年 3 月の復活節の日曜日の朝、関西方面（西宮市）のある教会で先生がキリストの復活のことを話された。

「聖書に復活の記事が一つも書いてなくても、私はキリストの復活を信じるね。信ぜざるを得ないね。イエスほどのお方が、もしもよみがえらないとしたら、——十字架の上に死につばなしだったとしたら——、これほど不合理なことはない。

父なる神の御旨に完全に従い切ったイエス、父の聖意を完全に体現し、聖意を行じた義人イエスが復活されるほど自然なことではない。もはや肉体ではない高次の霊的生命体となつて顕現したのが復活という事態なのだ」

と。その先生のほとばしり出る迫力ある言葉に私は打たれた。目からうろこが落ちる思いであつた。これこそがイエスの復活という事態のほんとうの受けとり方だと思つた。先生は、いわゆる奇蹟などは存在しないとされる。聖書に記されたキリストの奇蹟の御業、それを否定なさるのかというと、そうではない。全くその逆だ。奇蹟と人の目に映る事態は、実は神の聖意志の発露、霊法の発現にほかならない、と。キリストは神の聖意を体現したお方、キリストを通して神の聖なる霊法が現象界にも現われた。それが不思議であり、奇蹟と映るだけのことである。イエスは終末の神の国において成就する現実を既に地上で現じつつ歩いておられたのだ。

絶対恩寵 私が先生から受けて最も有難く思っている信仰的角度は次の点である。先生は常に、「絶対恩寵」ということを言われる。キリストの十字架の贖罪の恵みは、絶対無条件。こちらの側の状態いかに関わらず常に新たに迫り来たり、

「お前はもう十字架で片付いてしまっているよ、お前の我執の罪も、いな、汝自身を完全にあがないとつてしまったからね。お前は私の十字架で、無「罪」、無「私」とされているのだよ」

と。これが十字架のあがないの絶対恩寵の事態なのである、と。しかも、この贖罪の完全性は、単に過去の私の罪を許し給うたというにとどまらない。過去・現在・未来の一切である。私というものの全存在を根底より徹底的にあがないとつて下さったというのである。十字架で「無」私、「無」罪とされてしまっている。「無」を賜^{たまわ}っている。しかも、これは



絶対無条件の恵みなのである。長い年月を経て私はこの恵みをからだで受けとることができるようになった。それ以来もはや何の迷いもない。いつも

「主よ!」「主イエス・キリストさま!」「主様!」

の祈りでもって、十字架の絶対恩寵の場に立ち帰る者とされた。それ以来、私には、何者かであろうとか、何かを為さなければ、といった思いはもはや無い。ただ、

「主よ、貴方が私の中で生き動き在って下さい。貴方の御業をなさって下さい、私をして貴方の忠実なしもべであらしめて下さい」

との祈りあるのみである。

祈り 先生によって導き入れられた世界は、このように、十字架を根底として、そこに無条件に臨み給うみ霊の生命の世界である。力あるみ霊のお働きに委ねてゆく世界、絶対帰依の信の大道である。先生において、いつも素晴らしいと思うのは祈りのおすがたである。先生はほんとうにキリストの中に投げ身して祈られる。その祈りの姿に私はおごそかにして聖なるものを感じる。深い感動をおぼえる。

霊と肉 ロマ書の 7 章、8 章の「肉」と「霊」の対照に関して、先生は、肉とは肉体のことではなく、自己中心の在り方をいい、霊とは精神（靈魂）のことではなく、神中心、キリスト中心の在り方をいう、と明言されている。肉体にかかわることであろうと、精神にかかわることであろうと、自己中心の在り方であるならば、それは「肉」であり、神中心、キリスト中心の在り方ならば、それは「霊」である、と。どんなに高尚で崇高に見える営みであつても、それが自己の名誉・名声を求めているものならば、それは結局、自我の拡大、自己追求に他ならず、「肉」のわざである。このような聖書把握に接して、

「我が心、定まれり」

の思いであつた。いわゆる「聖」と「俗」の対立的世界ではなかった。神・キリストの前には聖も俗もない。十字架のキリストに托身し、「無」私の根源的・絶対恩寵に貫かれて、「主よ!」の祈りの中で営まれる業は、それがどんなにつまらなく見えるものであると、はじめな結果に終わると、神的な輝きをもった営みなのである。どんな営みにも喜びを見出すことができる。主がともに在すならば、感謝と喜びが湧き出でよう。

最後にルターの言葉

「明日この世界が没落すると知ったとしても、今日のうちにリンゴの若木を私は植えるよ。」

„Und Wenn ich wüßte, daß morgen die Welt untergeht, so würde ich heute noch mein Apfelbäumchen pflanzen.“ (著作集第七巻『聖書の人ルター』の挿絵より)

み霊の祈りをもつて為された業は永遠の質をもつて、御国において輝くからである。



「エン・クリスト」第 47 号 創世記（第 11 回）
ヤコブの旅路（3）——エサウとの再会——

1991 年 7 月発行

ギレアドの山地でヤコブに追いついたラバンは、ヤコブの逃亡とラバンの家の守り神の像のことでヤコブを非難したが、ヤコブらの天幕をくまなく探してもなお「守り神の像」が見つからなかったことから逆にヤコブの怒りを招く羽目となった（第 43 号参照）が、ラバンとヤコブは和解し、今後それぞれが互いの領地を相侵すことのないことを誓い合った。そして次の日の早朝、ラバンは娘や孫達に別れをつけて帰途についた（創 31・43～32・1）。

こうしてラバンとの問題が片付いた今、ヤコブにとつての最大の問題はエサウとの再会であった。実にエサウとの和解なくしてはヤコブは故郷に辿り着くことができない。もともとヤコブが故郷を離れて異郷の地へと旅立たなければならなかったのは、ヤコブが策略を用いて兄エサウから長子の特権を奪い取り、兄の怨みを買ったからであった。あれから既に二十年、苦労に苦労を重ねてきたヤコブではあるが、はたしてエサウの怒りと怨みは消えていくだろうか。ヤコブにとつてこれからの道のりは、気の重い旅立ちであった。折しも突然、神の御使いたちがヤコブの前に現われた。

「ヤコブは彼らを見たとき、『ここは神の陣営だ』と言い、その場所をマハナ

イム（二組の陣営）と名付けた」（創 32・3）。

期せずして神の御使いたちの陣営にさしかかっていた。神の御使いたちがヤコブの行く手を祝福してくれているようだ。ヤコブよ、恐れるな、神に信頼せよ、と。そこでヤコブは、エドムの野にいる兄エサウのところにあらかじめ使いの者を遣わして兄の御機嫌を伺おうとした。ところが、エサウのところへ行って来た使者の報告によると、エサウの方でもヤコブを迎えるために四百人の供を引き連れてこちらへ向かつてくる途中であるという。どうやら、使者はヤコブの口上を伝えるどころか、四百人のエサウの一団を見て驚いて帰つて来たようだ。ヤコブが故郷への旅路にあることをエサウは風の便りに聞き知っていたのであろうか。ヤコブは動揺した。

「ヤコブは非常に恐れ、思い悩んだ末、連れている人々を、羊、牛、らくだな

どと共に二組に分けた。エサウがやって来て、一方の組に攻撃を仕掛けても、

残りの組は助かると思つたのである。」（創 32・8～9）

兄エサウが四百人の供を連れてこちらへやって来る。これをどう解釈したらいいのか。兄の心から憎しみも怨みも消えて、弟なつかしさに心から喜び迎えに来てくれるのではないか。そうだったらいいのだが。いやそう信じたいのだが。しかし、もしその反対であつ



たなら…。ラケルはどうなる、子供達はどうなる、…最悪を想定して対策をたてなければ…。神の護りを信じつつもなお、ヤコブは人知の限りを尽くそうとした。そこから生まれた策が、人々や家畜を二組に分けることだった。しかし、そうしてから、ヤコブは祈った。

「わたしの父アブラハムの神、わたしの父イサクの神、主よ、あなたはわたしにこう言われました。『あなたは生まれ故郷に帰りなさい。わたしはあなたに幸いを与える』と。わたしは、あなたが僕に示してくださいましたすべての慈しみとまことを受けるに足りない者です。かつてわたしは、一本の杖を頼りにこのヨルダン川を渡りましたが、今は二組の陣営を持つまでになりました。どうか、兄エサウの手から救ってください。わたしは兄が恐ろしいのです。兄は攻めて来て、わたしをはじめ母（＝ラケルやレアのこと）も子供も殺すかもしれません。あなたはかつてこう言われました。『わたしは必ずあなたに幸いを与え、あなたの子孫を海辺の砂のように数えきれないほど多くする』と。」

（創 32・10～13）

この祈りの中にヤコブの真情が吐露されている。難事に直面して人の心は動揺する。善き方^{ほう}を信じたい。しかし、不吉な予感が心をかき乱す。こんな体験をされた方も多いのではないだろうか。そんな時に、神・キリストに連っている魂はまことにさいわいだ。そんな時には、とに角、祈ることだ。祈らないではいられない。率直に今の心境を、苦境をキリストの御前に吐露すればよい。

「主様、助けて下さい。主様、御力を下さい。主様、どうか道を開いて下さい！」と。パウロは次のようにすすめている。

「主は近し。何事をも思い煩うな（＝思い煩わなくていいのだよ）、ただ事ごとに祈りをなし、感謝して汝らの求めを神に告げよ。さらば凡て人の思にすぐる神の平安は、汝らの心と思とをキリスト・イエスによりて守らん。」（ピリピ書 4・5～7）

ヤコブはこのようにして祈った後、その夜はそこに野宿して、

「自分の持ち物の中から兄エサウへの贈り物を選んだ。それは、雌山羊二百匹、雄山羊二十四匹、雌羊二百匹、雄羊二十四匹、乳らくだ三十頭とその子供、雌牛四十頭、雄牛十頭、雌ろば二十頭、雄ろば十頭であった。それを群れごとに分け、召し使たちの手に渡して言った。『群れと群れとの間に距離を置き、わたしの先に立つて行きなさい。』」（創 32・14～17）

そして、ヤコブは各群れを導く召使いたちにエサウへの伝言を託し、これは僕ヤコブから主エサウへの恭順の意を表わす贈り物である旨を述べさせることとした。こうして、贈り物を先に行かせたあと、ヤコブ自身は、その夜、野営地にとどまった（創 32・18～22）。しかし、ヤコブはその夜また起き上り、



「二人の妻と二人の側女、それに十一人の子供を連れてヤボクの渡し（＝浅瀬）を渡った。皆を導いて川を渡らせ、持ち物も渡してしまうと、ヤコブは独り後に残った。」（創 32・23～25）

どうも落ち着かないヤコブである。妻や子供たちや持ち物を連れて川を渡らせてから、「ヤコブは独り後に残った」とはどういうことなのか。一緒に川を渡って、皆を先に行かせたあと、自分だけは、渡った川岸に残っていたというのか、再びこちらへ戻って川のほとり、あるいは野営地に居残ったというのか、聖書の記述からは状況がはっきりしない。しかし、いずれにせよ、皆から離れて、ただ独りになった、一人つきりになった、ということは明らかである。何のために——祈るためだったろう。祈り抜きたかったのだらう。そんなヤコブを突然とつかまえた大男がいた。正体不明の大男は夜明けまでヤコブと格闘した。

「ところが、その人はヤコブに勝てないとみて、ヤコブの腿の関節を打ったので、格闘をしているうちに腿の関節がはずれた。『もう去らせてくれ。夜が明けてしまうから』とその人は言ったが、ヤコブは答えた。『いいえ、祝福してください。あなたは離しません。』『お前の名は何というのか』とその人が尋ね、『ヤコブです』と答えると、その人は言った。『お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ。』」（創 32・26～29）

ヤコブと格闘したのは神の使いだったようだ。なぜ神の使いが突然現われて取っ組み合いを演じたのか。おそらくヤコブを叱咤激励し、恐れることはない、神様がついていて下さる、お前は敢然と群れの先頭に立ってエサウに直面するのだ、と促したかったのではないだろうか。神の使いと取っ組み合いをしているうちにヤコブの全身に力がみなぎってきた。神の使いはタジタジとなった。「もう去らせてくれ。夜が明けてしまうから」と言わせるまでにヤコブは奮闘した。神からの祝福を受けとるまでは絶対に離しません、とヤコブもしがみついた。このヤコブの一念に神の使いの方が根負けした。

「お前はもうヤコブ（押しのける者）ではなく、『イスラエル』（＝『神と取っ組む者』、神に負けて、神の勝利を賜った者の意〔小池辰雄著作集第十巻の一月十四日参照〕）だ」と。

こうして神の勝利を賜ったヤコブは陽が昇ると、びっこをひきながらも喜び勇んで出立った。もはや恐れはなかった。エサウが四百人の者を引き連れて来るのが目に入るや、ヤコブは決然と家族の先頭に立った。そして、

「兄のもとに着くまでに七度地にひれ伏した。」（創 33・3）

これはヤコブの全き砕けの姿と受けとりたい。すると、

「エサウは走って来てヤコブを迎え、抱き締め、首を抱えて口づけし、共に泣いた。」（創 33・4）



まるであのルカ伝の放蕩息子を出迎えて抱きしめる親爺おやじさんの姿をほうふつさせるような情景だ。エサウの心は溶けていたのだ。怨みは去っていたのだ。ヤコブがエサウの顔を仰き見たとき、

「兄上のお顔は、わたしには神の御顔のように見えます。このわたしを温かく

迎えてくださったのですから。」(創 33・10)

とのヤコブの言葉には実感がこもっている。そしてまことに美うるわしい。和解をもたらして下さったのは神御自身であった。異郷の地での 20 年の労苦と祈り、これによってヤコブ自身が大いに鍛えられ、碎かれ、そして、たとえ一途であったとはいえ兄エサウを苦しめたことに対する悔悟の気持が、神様に受納され、エサウの心を神が柔げ給うたのではなからうか。神は愛する子を鍛錬し給う。ヤコブは神の賜う試練の炉で錬り鍛えられた。そして「イスラエル」の名を賜ったのであった。



「エン・クリスト」第 48 号 創世記 (第 12 回) ヨセフの試練

1991 年 10 月発行

「ヤコブの旅跡」は前回をもって終りとし、今回からはヨセフの生涯を扱う。ヨセフに関する創世記の叙述は実に生き生きとしていて躍動的である。本誌の読者はぜひ今一度、自分の目で創世記 37 章及び 39 章以下を読んでいただきたい。ここには印象深く思われる箇所を拾いつつヨセフの生涯をたどってみたい。

●生いたち

ヨセフはヤコブ（イスラエル）の十二人の男の子の第十一番目であり、ラケルの切なる願いがかなって賜った子であった。そのラケルはパダン・アラムからカナンの地にたどり着いたあと、ベテルを経てエフラタ（ベツレヘム）へと向かう途上で産気づき、ヨセフの弟ベニヤミンを産んで息を引き取る。ラケルはお産が重く、生まれた子をベン・オニ（わたしの苦しみの子）と名付けたが、父（ヤコブ）はこの子をベニヤミン（幸いの子）と名付けた（創 35・18）。

さて、ヤコブの息子たちは次の十二人であった。すなわち、ラケルの姉のレアから生れた子が、ヤコブの長男ルベン、つづいてシメオン、レビ、ユダ、イッサカル、ゼブルンの六人、ラケルから生まれた子がヨセフとベニヤミン、ラケルの召使ビルハの子がダンとナフタリ、レアの召使ジルパの子がガドとアシエルである。

●夢見る者

「ヨセフは十七歳のとき、兄たちと羊の群れを飼っていた。まだ若く、父の側女ビルハやジルパの子供たちと一緒にいた。ヨセフは兄たちのことを父に告げ口した。イスラエルは、ヨセフが年寄り子であったので、どの息子よりもかわいがり、彼には裾の長い晴れ着を作ってやった。兄たちは、父がどの兄弟よりもヨセフをかわいがるのを見て、ヨセフを憎み、穏やかに話すこともできなかった。」（創 37・2～4）

父の格別の寵愛のゆえに兄の憎しみを受けることとなったヨセフであるが、それに加えて、彼は不思議な夢を見てはそれを兄たちに語り、ますます兄たちの憎しみ・妬みを招くこととなった。その夢とは、畑で兄たちと共に束を結わえていると、ヨセフの束が起きて立ち、兄たちの束がその周りに来て、ヨセフの束にひれ伏した、とか、また、太陽と月と



十一の星がヨセフにひれ伏している、といったもので、兄たちの自尊心を傷つけるような内容の夢であった。

さて兄たちが北方シケムの野で父の羊の群れを飼っていたとき、父は、兄たちと羊の群れの様子を見てくるようにと、ヨセフをヘブロン谷から送り出した。地図で見るとヘブロンからシケムまでは90キロほどある。ヨセフはシケムにたどり着いたが兄たちの姿が見えない。どうやら更に20キロ北のドタンの野の方へ行ったらしい。ドタンはエジプトに通ずる隊商の通路に当たっていた。ヨセフはドタンへと急いだ。兄たちは、はるかにヨセフの姿を認めるや、ヨセフを殺す相談をはじめた。

「あの夢見る者がやって来る。さあ、彼を殺して穴に投げ入れ、野獣が彼を食ったと言おう。そして彼の夢がどうなるか見よう。」(創37・19・20)

長兄のルベンはさすがに命まで奪うことに反対し、何とかヨセフを助けようとして、穴に投げ入れるよう提案する。そこで兄たちはヨセフを待ち受け、彼をとらえ、着物、晴れ着をはき取り、彼を穴に投げ入れた。

兄たちはそれから食事を始めるが、ふと目を上げると、イシュマエル人の隊商がギレアドの方からやって来るのが見えた。今度はユダが兄弟たちに、ヨセフをイシュマエル人に売ることを提案する(この時、ルベンはその場に居ない)。彼らはヨセフを穴から引き上げ、銀二十シケルでヨセフをイシュマエル人に売った。(大人なら銀三十シケルであるが、ヨセフはまだ子供っぽいので二十シケルで売られた)。隊商たちが去った後、ルベンが穴に帰って見るともはやヨセフの姿が見えないので、彼はいたく嘆き悲しむ。

聖書の右の記述は、実は、二つの異なる伝承が基となっているため相互にくい違っている(ルベンの提案とユダの提案。ユダの提案のときはルベンが不在など。また、イシュマエル人の隊商とミディアン人の商人とが別のように記述されているが、両者は同一と考えられる。)が、これ以上立ち入らないでおこう。

とにかく、ヨセフを秘かに救い出したかったルベンは、ヨセフを失っていたく悲しむが、兄弟たちは、ヨセフの着物、かの晴れ着を雄山羊の血に浸し、これを父のもとへ送り届けて、「私たちはこれを見つけましたが、あなたの息子の着物かどうか見さだめてください」

と言わせた。父は直ちにそれをヨセフの着物と確知し、ヨセフは野獣にかみ殺されたと思い、幾日も幾日もその子のために嘆き悲しんだ。

「息子や娘たちが皆やって来て、慰めようとしたが、ヤコブは慰められることを拒んだ。『ああ、わたしもあの子のところへ、嘆きながら陰府^{よみ}へ下って行く

う。』父はこう言って、ヨセフのために泣いた。」(創37・35)

最愛のヨセフを不慮の死によって失ったヤコブの深い悲しみ、わが子のもとへ行きたいと死をも願う父のすがた。そこにあるのは、いかなる時にも神を信じて動じない信仰の勇



者やコブでもなければ、数々の試練に耐え抜いてきた不屈のヤコブでもない。一切をかなぐり棄てた裸の人間、平凡な弱い一人の人間のすがた、まことに人間らしい人間のすがたである。それがかえって深く私の胸を打つ。父親の真情がそこにある。

それにしても、かくも父を嘆かしめる兄たちの罪の深さよ。それを彼らは、ヨセフを苦しめた罪とともに、重く身に負っていかねばならない。

●エジプトでのヨセフ

さてヨセフはイシュマエル人の隊商に連れられてエジプトに下り、そこでファラオの宮廷の役人で侍従長であったエジプト人ポティファルに買い取られた。つまり、奴隷とされたのである。奴隷とは本来、主人の所有物であり、主人はこれを意のままに使役することができる。もつとも、

「古代イスラエルにおける奴隷の状態は、屈辱的なものでもなく、つらいものでもなかった」

と『聖書辞典』（新教出版社編、1968 年、327 頁）には記されている。とはいえ、奴隷であるからには、自己の意思ではなく、主人の意思に服さなければならない。主人の意思、主人の命ずるところ、それに絶対的に従わねばならない。名門ヤコブ家の御曹子ヨセフが異邦人たるエジプト人に奴隷として仕えねばならぬとは！ 屈辱的なことではないか。自分をそんな境遇に陥れた兄たちを怨みもしよう。自己の不運を嘆きもしよう。また、素直に主人の命に従い、仕事を忠実に全うするには心の葛藤があらう。ところが、ヨセフにおいては全く異なっている。彼の怨みや嘆きやつぶやきは少しも記されていない。それどころか、全く明るいのである。まるでヨセフの身边に光が発しているというか、光が彼を包んでいるかのようなのである。次のように記されている。

「しかし主なる神がヨセフと共に居られたので、彼がエジプト人の主人の家に居る間、ヨセフのすることはすべてうまく行った (so daß ihm alles gelang)。」(創 39・2) (メンゲ訳)

「主が共におられ、主が彼のすることをすべてうまく計らわれるのを見た主人は、ヨセフに目をかけて身近に仕えさせ、家の管理をゆだね、財産をすべて彼の手に任せた。主人が家の管理やすべての財産をヨセフに任せてから、主はヨセフのゆえにそのエジプト人の家を祝福された。主の祝福は、家の中にも農地にも、すべての財産に及んだ。主人は全財産をヨセフの手にゆだねてしまい、自分が食べるもの以外は全く気を遣^{つか}わなかった。」(創 39・3～6)

「主が共におられた」

ということが鍵なのである。ヨセフの心の中のことは何も書かれていないけれども、ヨセ



フは主なる神を信じ抜いた。主なる神がヨセフを包み、ヨセフは主の御懷の中に己が身を投じ入れ、主の御懷を安らいの場所とし、力と知恵の源泉とした。ヨセフには不思議な神様がついておられる、神様がヨセフの味方をして、ヨセフのする事、なす事をことごとく成就させておられる。こんな風にポティファルの目に映ったのであろう。あれは誠実な男だ、頼りになる男だ、あれにすべてを任せよう。こう思い定めた主人は、すべてをヨセフに委ねたところ、

「主はヨセフのゆえにそのエジプト人の家を祝福された」
のである。

「主の祝福は、家の中にも農地にも、すべての財産に及んだ」
のである。

ひるがえって我々の周囲に目を転じてみよう。我々はしばしば、宮仕えの辛さ、不自由さをかこつ。自由業や自営業の人、あるいは、組織の頂点にある人は別として、大部分の人は、「仕える身」なのである。上に何人かの上司がいてその命に従わねばならぬのである。自由業や自営業の人でさえ、実は、取引先だとかいろんな人間関係の中で、見えざる上司、その意に従わざるをえない対人関係がいろいろとあるものだ。かくして、自分が王者として、意のままに振る舞い、意のままに欲するところを実現してゆく、といった職業なり仕事なり、人生というものは殆ど望み薄である。それが人をして不自由と感ぜしめ、仕事のやりがい、人生の生きがい、を見出しえないと嘆かせるに至る。しかし、ヨセフを見てみると、問題の本質はどうやら境遇ではなさそうだ。主なる神が共に居て下さるかどうか、自分が内に主なる神（キリスト者においては主キリスト）を確^{しか}と宿しているかどうか、それが根本問題なのである。ヨセフは奴隷の身でありながら、その内実は自由人中の自由人である。のみならず、彼によって主人ポティファルの全家は神の祝福にあずかってしまったのである。事はポティファルの家でのヨセフという小さな事では終らなかつた。ヨセフはこの後、運命のいたずらとでもいうべき苦難の道を歩かされながら、遂にはエジプトの宰相の地位に抜てきされ、エジプトの国を救うに至るのである。

●主^{つか}に事^{つか}する如く

ヨセフを神の民（キリスト者）と見、エジプト人ポティファルの家（広くはエジプトなる国）を異邦人（ないし異邦の世界）ないしは「この世」（現世、地上の世界、今の時代）と見たてるならば、エジプトに在るヨセフとは、正にキリスト者が「この世」「異邦世界」に置かれてある（実は遣わされている）状況だと言えよう。新約聖書、ことにヨハネ福音書では、「世」は「神の国」とは相いれない、対立＝敵対関係にあるものとして捉えられている。主イエスは、敵対者たちに対して、

「汝らはこの世より出で、我はこの世より出でず。これによりて我なんじらは



己が罪のうちに死なんと言えるなり」(ヨハネ伝 8・23～24)

と言いつた。また、弟子たちとの別れの祈り(大祭司の祈り)の中で、

「我は御言を彼らに与えたり、而して世は彼らを憎めり、我の世のものならぬごとく、彼らも世のものならぬに因りてなり。わが願うは、彼らを世より取り給わんことならず、悪より免れさせ給わんことなり。」(ヨハネ伝 17・14～15)

と祈つてくださっている。また、弟子ヨハネはその手紙の中で、

「なんじら世をも世にある物をも愛すな。……おおよそ世にあるもの、即ち肉の慾、眼の慾、所有の誇などは、御父より出づるにあらず、世より出づるなり。世と世の慾とは過ぎ往く、されど神の御意をおこなう者は永遠に在るなり。」

(ヨハネ第一書 2・15～17)

と書いている。そこで否定されているのは「世」の精神——パウロが「肉」と表現しているもの——である。「世」そのものではない。それどころか、神はこの「世」を救わんとし、御子キリストをお遣わしになったのである。

「それ神はその独子^{ひとりご}を賜うほどに世を愛し給えり。すべて彼を信する者の亡びずして、永遠の生命を得んためなり。神その子を世に遣したまえるは、世を審かん為にあらず、彼によりて世の救われん為なり。」(ヨハネ伝 3・16～17)

キリスト者は、この世が悪しき世、罪の世であるからといって、厭世的^{えんせい}になつたり、この世からの逃亡、脱出をはかつてはならない。主キリストの御意^{みこころ}は、我らが世に在りて、かつ、世に染まらぬこと、

「悪に勝たることなく、善をもて悪に勝つ」(ロマ書 12・21)

ことである。我らは御旨^{みむね}によつて世に遣わされているのである(ヨハネ伝 17・19)。さればこそ、主は、

「なんじら世にありては患難^{なやみ}あり、されど雄々しかれ。我すでに世に勝てり」(ヨハネ伝 16・33)

と励まして下さる。主に祈り入る者には力を与え給う。この力(みたまの力)がなければ勝つことはできない。

パウロは、当時の奴隷と主人の関係について次のように勧めている。

「僕^{しもべ}たる者よ、凡ての事みな肉につける主人にしたがえ、人を喜ばする者の如く、ただ眼の前の事のみを勤めず、主を畏れ、真心をもて従え。汝ら何事をなすにも人に事^{つか}うる如くせず、主に事^{つか}うる如く心より行え。汝らは主より報^{むくい}として嗣業^{しぎよう}を受くることを知ればなり。汝らは主キリストに事^{つか}うる者なり。」(コロサイ書 3・22～24、エペソ書 6・5～8)

キリスト者たる奴隷が、キリスト者でない主人に仕え、従う道は、即、主キリストに仕え、従う道であるという。「肉」の主人と思えばつぶやきも生まれよう。しかし、そのような主



人であっても、

「わが為すは主キリストに為すなり」

の心根で誠心誠意つかえよ、というのである。ヨセフは正にそれを実践した。そこに豊かな主の祝福が双方に臨んだ。ペテロは更に、

「ただに善き者、寛容なる者にのみならず、情^{なさけ}なき者にも服^{したが}え。人もし受くべきなり。……もし善を行いてなお苦しめらるる時これを忍ばば、これ神の誉^ほめたもう所なり。汝らはこれがために召されたり」(ペテロ前書 2・18～21)

とまで言っている。キリスト者の処世道は実にこのようなものである。

